

御復活 2020

いつも何かが足りない、ぼくのどの直観にも隙がある。それに通俗的だ、この完全でないことは、通俗的だ、ぼくは決してこれほど通俗的ではなかった、この不安ほど、この《キリストを持たぬこと》ほどにはキリスト—孤独の中で純粹に直観することですべて失われるわけではない仕事の道具としてのひとつの顔。
ピエル・パオロ・パゾリーニ

《主よ、...あなたが御心に留めてくださるとは、人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう あなたが顧みてくださるとは》わたしの人生でこの問いほど心を打たれたものは他にない。キリストだけがわたしの人間性のすべてを心に留める。なぜなら、あの「人」、ユダヤ人のナザレのイエスはわたしたちのために死んで、復活されたからだ。あの復活した「人」は、一人一人の人生の確実性が由来する「現実」だ。死から復活したイエスの霊において生きる地上でのすべての経験は、「永遠」の中で開花する。この開花は、世の終わりにのみ生じるのではなく御復活のあけぼのの中ですでに始まっている。だから人生の究極の理想は物乞いの姿にある。歴史の本物の主人公は物乞いである。人間の心を乞うキリスト、そしてキリストの心を乞う人間。
ルイジ・ジュッサーニ

コムニオーネ・エ・リベラツィオーネ

